

2026 年度活動計画(案)

(ア) 活動の抱負

<会長挨拶>

今から 10 年前の 2016 年初のことを思い出します。その前年には SDGs やパリ協定についての国際的合意が成立し、世界がより持続可能な方向に進んでいくことは誰もが疑いを持っていませんでした。国際協力、国際協調は絶好調にあったと言っていいでしょう。しかし、2016 年は逆風が吹きはじめた年でもありました。英国の EU 離脱から始まり、米国大統領選挙でのトランプの当選は、大きな衝撃を与えましたが、まだこの時点では、国際秩序が根本的に変わるということまでは、その萌芽があることに危惧を抱きつつ、誰もが本気で予想はしていませんでした。

世界が本格的に変わり出したのは 2025 年からだと思います。トランプ政権は国際秩序の改変に本格的に手を付け始めます。それは「法の支配」から「力の支配」への転換です。まずは関税政策。ここで、第二次大戦の教訓として世界が取り組んできた自由貿易の考え方に決定的な打撃を与えられます。さらにカナダを米国の 51 番目の州とする、あるいはグリーンランドを併合するなど、力を背景に同盟国にも牙をむき始めます。さらにヴェネズエラへの攻撃と大統領の拉致、イランへの攻撃など、これまで半世紀以上見られなかった主権国家への軍事力による実力行使を立て続けに行っています。17 世紀以来の主権国家体制への攻撃です。国際法はそれを遵守しないだけでなく、露骨にそれに対する嫌悪と軽蔑を明言しています。

環境や貧困などグローバルな課題についても、トランプ政権はそれに取り組むこと自体が「極左」と言われかねないような気を作りだしています。USAID を、有無を言わず閉鎖したり、Diversity (多様性)、Equity (公平性)、Inclusion (包括性) を排斥したりと、国際協力やそこで尊重されてきた価値に対する攻撃は止まりません。さらに、このような動きに呼応する政治勢力の台頭が世界各地で見られます。日本でも JICA が右翼のデモ隊に取り囲まれるような事態が生じています。

このように書いていると絶望的になってしまいますが、このような時代だからこそ国際協力、国際開発の実務家、研究者には大きな役割があります。私が折に触れて強調していることですが、戦後 80 年、ブレトンウッズ体制のもとで途上国に援助や投資の形で資金が供給されるとともに、多くの国が貿易を通じて豊かになってきました。世銀によれば 1990 年から 2020 年の 30 年間で、1 人 1 日 2.15 ドルを基準にした世界全体の貧困比率は 37.9% から 9% にまで減少しています。就学率・識字率、平均寿命などの指標も軒並み改善しています。グローバリゼーションは批判にさらされていますが、マクロ的に見れば多くの人々を豊かにしてきたことは間違いないです。

世界の全体の 1 人当たり平均 GNI は約 1 万 3000 ドルです (2023 世銀)。World Happiness Report (2022) によれば、このくらいを境に、これより所得が低くなると生活の満足度は低下

するが、これ以上所得が増えてもそれほど満足度が上昇しないとしています。世界全体が平等になれば、人類全員がそこそこの生活を送ることができるまで、世界の生産力が到達しているのです。国際開発の実務家、研究者が行うべきことは、科学的なエビデンスに立って、どのような世界を作るべきか、そこに達成するためにはどのような政策的介入が必要か、何が役にたつて何が役に立たないのか、などについて常に議論を続け、世界全体が強調して問題に立ち向かう環境を醸成することです。

開発の実務者、研修者の集合である SRID の役割・使命もはっきりしています。世界で陰謀論のような根拠のない言説が猛威を振るっていますが、それを止めることができるのはそれぞれの分野の専門家によるチェック・アンド・バランスです。SRID はどこからもこのような圧力を受けずに、プロフェッショナルな議論と実践が行える自由なフォーラムとして活動してきました。現在の状況ではその役割・使命はますます重要になっています。ぜひ、ご関心のある方のご加入をお待ちしております。(林 薫)

<代表幹事挨拶>

米国は米国第一主義やドンロー主義を掲げ、外交手段としての関税政策、対外援助経費・人員の大幅削減、一部の国際組織・条約等からの脱退、ヴェネズエラ大統領の拘束、キューバへの経済的締め付け、核開発を放棄しないイランへの攻撃など、相変わらず世界秩序を大きく揺るがす行動に出ています。また、ロシアーウクライナ戦争やイスラエルーパレスチナ戦争の停戦・和平に向けた動きは遅々としていて、当分解決しそうにありません。欧州諸国も経済状況が厳しい中、国防予算を増額し援助予算を減額しています。

国連は創設 80 年のパラダイム転換で組織改革・事業再編を行っていますが、実質的には予算不足に伴う人員削減や組織の統廃合が中心になっています。日本も高市政権発足後、「責任ある積極財政」を掲げて経済成長による国力の強化、様々な課題の解決を目指していますが、まだ始まったばかりで ODA への影響を含めて結果が出るのは当分先になりそうです。

このように、世界情勢が混とんとして先が読めない状況になっており、途上国に対する支援は人道支援分野をはじめとして先細りし、特に貧困国においては飢餓の発生、衛生状況の悪化など大きな影響が生じつつあります。他方、大国や周辺国の思惑による干渉などもあってか、地域紛争・内戦や政変が多発し、オートクラシー化が進み、民主主義が侵食される傾向にあります。

欧米ではコロナ渦発生のメカニズムや事実経過に関する研究が進み、明らかに人為的な計画・操作が行われていたという証拠さえ数多く出てきています。「世界は腹黒い」とはよく言われますが、必ずしも善意だけで物事が動くわけではありません。悪意ある一部の人達が自分たちの利益のために、起こるべくして様々な事象を発生させているとしたら、対処療法だけで状況は改善せず、原因を追究しない限り適切な対応ができないと思われれます。

こうした状況下、開発協力分野では何ができるでしょうか。従来のように復興支援、制度整備支援や人材育成といったマイクロな視点からの支援を進めていていいのでしょうか。できる

ことは限られるとは思いますが、問題の発生原因や根本問題にフォーカスし、問題の発生をできる限り抑えるような仕掛けを考えない限り、真に有効な開発成果には結びつかないのではないのでしょうか。

SRID においても、こうした視点・アプローチで課題解決に取り組む必要があるのではないかと感じています。この点で、SRID の会員には多分野かつ多様な知識・経験を有する人々が多く、こうしたアプローチも可能だろうと考えられます。特に、直接・間接に開発の現場に携わっている会員の方々におかれては、起こっている現象だけでなく、背景的な要因も含めた問題の本質がかなりみえている、或いは何かおかしいと疑問を持っておられる方も多いのではないかと推察されます。

SRID の活動においては、そうした多様なバックグラウンド・能力を持つ会員からのインプットが欠かせません。現役を退いたメンバーを中心に構成されている幹事会で議論ばかりしていてもあまり生産的ではありません。多忙ななかでも現役の会員がより多く参加できる、又参加しやすい活動となるようであれば、組織そのものが持続可能にはならないでしょう。また、少しでも世の中の役に立つような活動にならなければいけないと考えますので、会員の方々からの積極的なご意見や情報の提供を期待しています。(松田)

(イ) 活動方針

<総務>

- ・ 毎月 1 回幹事会を開催し、議事録を会員に配信する。
- ・ 幹事会の協力を得て、ニューズレターの年 8 回程度の発行を目指す。「自論公論」「イベントの概要報告」「新会員紹介」などの定例記事の他、会員相互の情報交換や近況報告を兼ねて、より多くの会員に投稿を呼びかける。
- ・ 新会員歓迎会などの懇親会を開催し、会員間の交流の機会を増やす。(山下)

<広報>

- ・ 定期的に HP を更新し、年に 2 回 SRID ジャーナルを発行する。
- ・ Facebook など各種メディアにより SRID 活動のプロモーションを行う。
- ・ 必要に応じてパンフレット・案内書の印刷、幹事の名刺作成などを行う。
- ・ 50 年間の SRID の活動を記録した電子媒体を Homepage に掲載する。(山岡)

<懇談会>

- ・ SRID 非会員も参加できる公開イベント。国際開発のベテランのみならず、国際開発に興味のある学生や、すでに国際開発分野で働いていてさらなるステップアップを目指す若い世代などの幅広い参加者を対象に、国際開発に関する時宜を得たテーマにつ

いてその分野のエキスパートに講演を頂く。そして、講演後に十分な質疑応答の時間を設けることで講演者も含めた全参加者が共に考える機会とする。

- ・ 懇談会のテーマと回数は登壇可能な講演者に合わせてフレキシブルに対応するが、国連関連と世界銀行などの国際開発金融機関関連を各 1 回、その他国際開発関連を 2 回、合計 4 回以上の開催を目指す。
- ・ その利便性よりオンライン開催は続けるので、対面のネットワーク懇親会は開催できない。しかし、懇談会を通じて、キャリア開発事業や SRID ジャーナルを含めた SRID の活動に対する非会員参加者の認知度を高め、キャリア開発塾カウンセリング申込者増や SRID ジャーナル読者登録者増、さらに SRID 新規会員増に繋げる。
- ・ 懇談会の成功は魅力ある登壇者探しがキーであり、会員の皆様には、登壇の自薦や登壇可能な知り合いの方の紹介をお願いしたい。(小林_文)

<フォーラム>

- ・ 2026 年度は会員の参加しやすいハイブリッド形式として、2025 年度のテーマであった複雑系の世紀の主要なテーマ、例えば、AI 革命、気候変動、経済のネットワーク化など、会員の関心の高いテーマを選定し、なるべく多くの会員が発表しうよう計画する。開催の時期は 11 月を優先して検討するが、場合によっては 2 月の開催もありうる。

(神田)

<SRID ジャーナル>

- ・ 2026 年度は SRID ジャーナル編集委員 5 名(小寺清、高橋一生、玉置佳一、福田幸正、山岡和純・編集委員長)に編集協力 1 名(飛田美保子)を加えた体制で企画・編集・発行を行う。7 月に第 31 号、2027 年 1 月に第 32 号を発行する予定。
- ・ SRID ニュースレター 2025 年 12 月号並びにジャーナル第 30 号で編集委員の公募を行ったところであるが、引き続き若干名のリクルートに努める。
- ・ SRID の強みの一つは外国語に堪能な会員が多いことである。世界に向けての発信を強化するため、第 28 号から新たに「巻頭エッセイ」及び「論考・インサイト」の冒頭に英文で短い要旨(アブストラクト、ブラーブ)を加え、これらの英文目次ページを追加したところである。1 年半の実績を踏まえ、2026 年度は、これをさらに発展させる可能性について検討する。(山岡)

<キャリア開発事業>

2021 年度に改編された事業内容に沿って、SRID キャリア開発事業の活動として、国連改革の影響を十分考慮し、以下の項目の活動を実施する。(鈴木)

- キャリア開発カウンセリング。
- ロスターの作成・運用
- 国際開発分野で働く女性のためのオンライン懇談会シリーズ 1 回
- キャリア開発フォーラムの開催 2 回
- キャリア開発に役立つ情報の提供: 「SRID キャリア開発」を 3 月と 9 月に配信

<勉強会>

- 2026 年度は「官民連携型開発協力に係る勉強会」を継続させ、引き続き事例研究を中心に議論を進めることとする。
- 勉強会は原則として 2 ヶ月に 1 回程度の割合で開催し、2026 年度内を目途に成果を取りまとめる。まとめた段階で報告書を作成し、幹事会に提出する。取りまとめた成果の一部をウェブ媒体等で対外発信することを目指す。(澤田)

<サロン>

2026 年度はさらなる活動の深化を目指す。会員に趣味や特技を披露してもらい他、や仕事に関連するテーマや時事問題などを取り上げて、talk and discussions をオンラインで行う。(岩波)